

の乗降客もまばらな田舎の街の風情であった。街の周辺には、黄色い葉っぱに色づいた長芋の畑が、可成りの面積にわたってとり囲んでいるのが、目立った風景である。

地震観測所は、13年ほど前の松代群発地震の時にも名を馳せたが、戦争末期に大本營の移転先として掘削された地下壕を利用したものとしても有名である。見物に訪ずれる人は多いが、100mの長さの石英管ひずみ計の設置してある大坑道に入ることは普通では許されない。所長の特別のはからいで、総延長2km位もある大坑道の奥深くまで見学することが出来て、大いに満足を覚えた。小坑道の出口に隣接する外側には細長く部厚い陸(オカ)屋根の平屋があり、天皇、皇后の安在所予定の部屋が残されている。更に皇族の子弟の学問所、つまり学習院になる筈だった校舎の建物まで準備されていたのには驚かされた。緑色のペンキの剥げかかったその木造の建物は、今は保育所に利用されていた。

松代の街まで戻って、街中にある象山(ぞうざん)記念館や象山神社を日の暮れるまで訪ね歩いてみた。あの幕末の蘭学者、佐久間象山は、こゝに生まれ育ち、仕官し幽閉もされた。象山は常に時代に先駆ける卓見を持ち、行動的な学者であったが、性狷介(けんかい)で人と調和できず、自信過剰がわざわざして、世に容れられることが少なかったことを知る人は多かろう。その博覧強記と篤学ぶりは、記念館に陳列されている数々の遺品で圧倒される程である。「和魂漢才」と云うよりは、「東洋の道徳、西洋の芸術」と標榜した当時の先進的儒学兼洋学者と云った方があてはまる。松代という小さな城下町が、当時の日本の第一級の思想家を生んだことは誠に興味深いことである。

学問や教育に理解を示し、学者を敬愛する信州の風土の特色は、松代に来てみると、象山の気迫のようなものが肌に感ぜられて、こゝに凝集しているように思えて来る。民宿「六文銭(真田家の家紋)」で明けた朝、山肌は紅葉に染まり、陽光は猫岳の山頂の雪を白銀に照らし、気分はまことに爽快だった。

(1979年1月15日)

## アメリカの印象

井内昇

昨年の春休みを利用して、4週間足らずではあったが、14年ぶりにアメリカ各地を駆足で旅行してきた。

国務省が組んでくれた日程が盛沢山であったため、羽田に帰り着いた時は疲労の極に達していたが、最近のアメリカの変化を自分の眼で確かめ得た満足感は大きかった。短い旅行にも拘わらず期待以上の収穫が得られたのは、各地で接した官民さまさまの人々の好意のお蔭であるが、その中でも留学時代の恩師である、現ウィスコンシン大(ミルウォーキー)教授のメイヤー先生の暖い歓迎は忘れられないものである。

「アメリカに来たら必ず自分の家に泊るように」というお招きを事前に頂いていた手前、余り気が進まなかったが、(と云っては罰が当るが)、ご好意に甘えて春にはまだ遠いミルウォーキーを訪れたのは4月5日のことであった。ミルウォーキーでは、右手の不自由な教授が自ら車を運転して駅ま

で出迎えて下さった時から、翌日夕方、夫人の車で駅まで送って頂いた時までの丸2日間、すべて教授と共に、教授のスケジュールに従って過すことになった。予期しなかった日本の都市についてのスピーチをスタッフ、院生等の前でさせられる破目になったことを除けば、この2日間はすべて心温まる思い出で埋められている。

ミルウォーキーで印象に残るひとつは、たまたま行なわれた地理学科教官採用テストに立ち合わされ、アメリカのスタッフ採用の実状を垣間見たことである。アメリカの大学では、教官ポストは公募で埋められる。応募者は先ず書類選考を受け、大学は応募者の中から1人乃至数人を招いてスタッフによる審査を行なう。このテストのことは、前夜の歓迎パーティで若手スタッフの話題の一つになっていたが、それは応募者が「キュートな若い女性」であるためらしかった。さて、2日目の午前11時に教官食堂へ連れて行かれると、すでに主任教授以下7~8人のスタッフが、1人のドレス・アップした、一見リンゼイ・ワグナーに似た小柄の若い女性を囲んで談笑していたが、これがテストの一部と聞かされて驚いた。食事をしながら、この女性は次々と浴びせられるあらゆるジャンルの質問(というよりは洗練された社交的会話とでもいった方がよい)に、正確さの中にウィットを交えながら即妙の返事をするのである。この1時間半位の昼食会でのインタビューで、スタッフは応募者の人柄、知識、考え方等を知り、一方、応募者の方もその教室の雰囲気や研究環境を判断するのだという。続いて午後1時半から約2時間、地理学科の大教室で、スタッフ、院生の他に学生まで網らした50人近い聴衆を前に、この若い女性の応募者は自分の専門テーマについて約1時間のスピーチを行ない、その後で聴衆から1時間以上にわたり次々に質問の矢が放たれたのである。若い女性が多くスタッフ等を前に、臆せず堂々と自分を売り込む態度は、日本では想像もできぬものであった。このように、採用に際して男女が平等に扱われる、ということは、女性にとって歓迎すべきことであろう。しかし、平等に扱われる、ということは、職業人としての能力、努力、義務、責任等についても全く平等に要求される、ということでもある。それは、女性の社会的地位が高い、といわれるアメリカでも、女性にとっては決して楽なことでは無かろう。今年の厳しい就職状況を耳にする時、ウィスコンシン大学地理学科の教室で堂々と自分を売りこんでいた若い女性の自信に溢れた態度を思い出すのである。

## 日本の国土面積

内藤博夫

必要があつてわが国の人口密度を調べていたときのことである。昭和50年の国勢調査報告第1巻を資料にして計算してみたところ、296人/km<sup>2</sup>という値がえられた。しかし別の文献では確か300人/km<sup>2</sup>となっていたことを思い出して不審に思った。いうまでもなく人口密度は人口を面積で割ったものである。わが国の面積は昭和42年に沖縄の本土復帰があつたりして、常に同じではないが、37万km<sup>2</sup>というのがわれわれの頭の中に定着していた面積であつた。日本の人口についてのデータに誤りがなかつたならば、面積が問題になる。そこで昭和50年のデータを使って何回か検算してみたが、どうしても300人/km<sup>2</sup>にはならない。不思議なことがあるものだと思ひながら何日かが過ぎ去つた。